

あかしん

総合印刷物企画・プランニング・デザイン・印刷・加工・オンデマンドデジタル印刷・デジタルメディア企画制作



半田中央印刷株式会社

〒475-0032 半田市潮干町1番地の21
TEL <0569> 29-2525 (代) FAX <0569> 29-4500
E-mail: main@handa-cp.co.jp http://www.handa-cp.co.jp

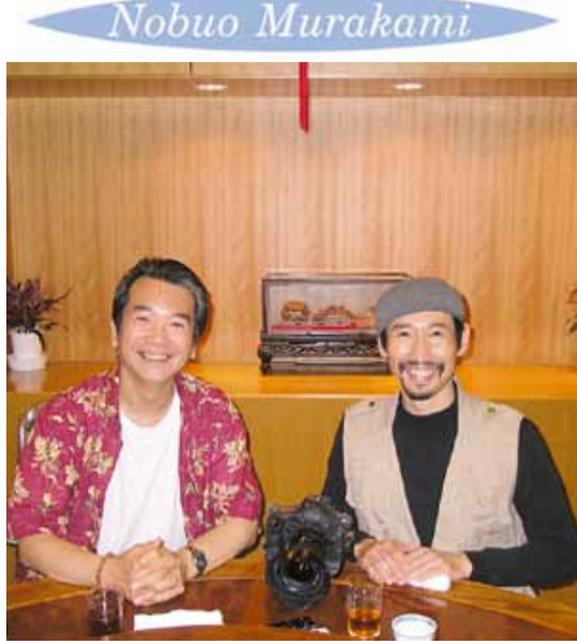
わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ http://www.akai-shinbunten.net <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861 企画・制作：株式会社 新聞ビル

聞きしに勝るスローな語り口だった。だが、独特の間合いが心地いいのだ。入り込む隙間がいっぱいあるから、安心出来るのだ。この間に、いろんな想像を巡らせることが出来る。言葉の余韻を噛み締めることが出来る。何度も「光栄です」という言葉が出た。相手への慮り、礼儀正しさには、頭が下がる。

戦場カメラマンになったわけ

「先輩に…お声をかけていただき…光栄です。戦場…カメラマンの…渡部…陽一…です」すべての話に…のような間合いがあるが、このままでは紙数が尽きる。以下…は省略する。

ゆっくり口調は、昔からだった。小学校時代に、よく友だちから「渡部君の話の方は、ヘン」と言われていた。カメラマンとして、諸外国をまわるようになってからは、知っている単語を使って、ゆっくり話すと理解してもらえたので、もともとゆっくりだった話し方に、拍車がかかったらしい。



撮影、鶴崎燃氏

元氣のでてくる“ことばたち”

165

村上信夫

1972年、静岡生まれ。今年40歳。剣豪小説好きな父の影響で、小中学校の9年間、剣道を習っていた。サムライジャーナリスト精神は、戦う相手にも敬意を払う剣道で

血だらけで「助けて」と泣き叫ぶ子どもがいても、どうすることもできなかった。そんなアフリカの状況を、大好きなカメラで撮影して多くの人に伝えたい。それが、戦場カメラマンになった、きっかけだった。

学生時代から日記を書いていた。最初は大学手帳に、毎日、その日の出来事や

光栄です

戦場カメラマン 渡部陽一さん

聞いた。自分が出会う人、訪れた異国の人を尊敬するよう心がけている。現地の人の声を聞き、自分の考えがいちばん正しいという考えは捨てるようにしている。

渡部さんは、明治学院大学に入っていないければ、戦場カメラマンになっていなかった。大学一年生のとき、生物学の授業で、アフリカには、昔ながらの狩猟生活を営んでいる人たちがいると教えられ、自分の目で確かめ、彼らと話してみたいと思った。バックパッカーの旅行者として、軽い気持ちでアフリカに入った

ら、そこで少年ゲリラ兵に、襲われて九死に一生を得た。この苦い経験が、現地の言葉を覚え、敵意のないことを伝える「ゆっくり丁寧な」話し方につながる。紛争地域だということを知らずに行ったのだ。ゲリラ兵に村を襲撃され

村上信夫プロフィール

2001年から11年に渡り、『ラジオビタミン』や『鎌田實いのちの対話』など、NHKラジオの「声」として活躍。この4月からは、全国を回り「嬉しい言葉の種まき」をしながら、文化放送『日曜はがんばらない』（毎週日曜朝10:00～）、月刊『清流』連載対談～ときめきトークなど、新たな境地を開いている。1953年、京都生まれ。元NHKエグゼクティブアナウンサー。これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。著書に『ラジオが好き!』（海竜社）『ことばのビタミン』（近代文芸社）『いのちの対話(共著)』（集英社）など。

ものなのだろう。

「カメラマンとして、何かの壁にぶつかったときや、戦場で気持ちがグラッしているときなど、過去に自分が書き記した言葉を読んで、初心に戻ったり、ハッとさせられることがたびたびある」という。

いつかは学校カメラマンに

渡部さんは、世界130を超える国を訪ねている。そのほとんどが、紛争地や戦禍に見舞われた地域だ。なぜ戦場にこだわるのか尋ねてみた。

「僕は世界中の紛争地をまわりながら、驚いたことがあります。それは、戦場という極限状況のなかでも、家族が普通に生活していて、笑顔を浮かべる瞬間があることでした。僕の取材スタンスは、一つ屋根の下で何カ月も生活をともにする、いわゆる密着取材型ですが、戦場でも、私たち日本の家族と変わらない、日常の生活風景があります。戦禍に生きる子どもたちや家族の肖像を、多くの人に伝えるための、戦場カメラマンでありたいと、思っています」。

最近、男の子の父親になった。世界を駆け回る渡部さんらしく「世海」と名付けた。フラインダーごしに見る子どもたちを見る目も変わった。「子どもたちの横にいる同世代の親たちに、気持ちが入りこんでしまいます。それと、家に早く帰りたいと思うようになり、今までより取材期間を短くするかわり、過去の人脈や情報網を駆使して、深い取材を行うようになりました」と笑う。



俳画/イネ・セイミ

ラジオが好き!

村上信夫

好評発売中

イネ・セイミプロフィール

フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日展画家の(故)川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。

俳画教室開講中

常滑屋

とき 月二回 第二・第四金曜日 午後一時～三時

会費 一回 二、二五〇円(三ヶ月分前納制) 問合せ ☎〇五六九三三五〇四七〇

インディアンフルート教室

開講しました。

誰でも気軽に吹けます

入会受付中!!

何か始めたいと、思っている貴女へ。数年後、素敵にフルートを奏でる姿が、そこにあります。楽しく個人レッスン致します。

講師 イネ・セイミ (フルート奏者 指導歴30年) 1レッスン・1時間5,000円(ティータイム付) 申込み ☎0569-89-7127 問合せ seimine@oasis.ocn.ne.jp

新シリーズ ヒューマンライフ

『新・現代家庭考』 就職

—自分ドラマつくろう— (15) 岡田 清治

結婚

「人形町にはユニークな店が多いですねある時道路に列をなして並んでいるのを見て驚いたことがあります。先頭の入口に『玉ひで』とあったので、みなさんは何を求めて並んでおられるのですかと、聞いたことがあります」

「鶏料理で有名な名古屋出身の前島さんが、どう思われるかわかりませんが、軍鶏を使っておいしくいただける雰囲気もあります。おいしいですか」

「そうですね。あそこはたまご丼は人気があつていつも満員ですね」「どうですか。一度行ってみたいですね」「ご案内しますよ」

「人形町には居酒屋もありますが、『笹新』はものすごく人気の居酒屋で開店してすぐ席が埋まるので、結局一度も入れませんでした」

「そうですね。私は知りませんが、とにかく飲み屋さんはいっぱいね」

「ところで、映画ですがリバイバルものですが、『ある愛の詩』にしました。ご覧になっていますか」

「いいえ」

「そうですね。それは良かったです」

二人は喫茶店を出て近くの映画館に入った。館内は上映前で薄明かりの照明によって全体を見渡せた。席は十分、空いていたので、後部の真ん中に座った。

前島は始まる前から胸の高まりを感じていた。隣の坂上の横顔をちらちらとかがつたが、静かな面持ちでスクリーンに目を向けていた。落ちてきている様子である。

映画が始まった。

前島はしばらくすると手を坂上の手の上に重ねた。坂上はじっとしていた。やがて前島は彼女の手を握った。すると坂上がビクッとする気配を感じたが、顔はスクリーンの方を向いたまま固定させていた。さらに前島は坂上の指と指の間に自分の指を静かに滑り込ませた。

すると坂上の手にぐっと力が入った。前島も強く握り返した。体中が燃えてくる感じである。手と手の感触を楽しみながら美しい画面を見やり舞上がりそうなる自分を抑えていた。

坂上の手は思ったより冷たかったが、柔らかな感じがあつた。前島が時々、強く握ると坂上も反応して強く握り返した。

スクリーンは悲恋のストーリーであつたが、前島は好感を持たれているから拒絶されないと判断して思い切って自分の顔を坂上の顔に近づけた。坂上は平静さをよそおうかのように目はスクリーンの方を見ながら前島の口づけを受け入れていた。はじめはくちびるを触れ合う程度であつたが、やがて力強く口づけをした。すると坂上の舌が前島の口に押し込まれてきた。

坂上の息があらなくなった。

前島は坂上の胸のふくらみを服の上から掴むようにしながらしばらく口づけを続けた。

映画がクライマックスに近づいてきたところで、前島は最初の姿勢に戻り、何事もなかったようにスクリーンの方に向き直った。

坂上はじっとスクリーンを見つめていた。

映画館を出た二人は、松坂屋の対面にあるインド料理店に入った。「この料理は有機野菜を使っているヘルシーですよ」

「そうですね。感じがいいお店ですね」

坂上は映画館の中の出来事を恥じらっているかのようにうつむき加減で話した。

「ある愛の詩」、いかがでしたか」

「結婚の難しさ、むごさを思い知らされた気がします」

「そうですね。僕には主人公の女性が『愛は後悔しない』というセリフが、とても理解できない」

「やはり愛の深さに根付いているのでしょうかね」

「そういうものですか」

「次の連休に近郊の山へハイキングに出かけませんか」

「はい」

「山は好きですか。そうですね。では、土曜日にしましょうか」

「はい。大丈夫です」

「東京は平野が広いので山のハイキングはどうしても遠くになります。今、考えているのは筑波山、高尾山、あるいは秩父の長瀨あたりですが、どこがお気に入りのコースがありますか」

「そうですね。筑波山に行きましようか」

「では、人形町からならJR上野駅中央改札口で十時に待ち合せて常磐線に乗って行きましよう」

二人は約束して別れた。

前島は坂上と別れ川崎に戻ったが、無性に飲みたくなったので駅近くのショットバーに入った。カウンター席は空き席があつた。

「バーボンの水割り、ダブルで……」

前島はバーボンのグラスを口に運び、半分ほどを一気に流し込んだ。

坂上はどのような女なのか。手を握り、口づけまですんなり許した。ところが映画館を出ると別人のような女に思えた。何か冷たいというか、陰のようなものを感じた。ただ、とろけるような舌触りの感触から宝石のような輝く肢体を連想していた。

次のデートも受け入れた。先ほどのことを思い巡らして「そうか、坂上は俺を受け入れているということかと、前島はそう思うことで満足できた。

ただ、次の瞬間、「愛は後悔しない」という名セリフについて、「愛の深さ」だとつぶやいたことにひっかかった。愛の深さは沼のように、あるいは深海のごとく到達点のないものではないのか。前島は愛欲と性欲は一体なものである。性欲のない愛情はありえない。少なくとも前島はそう思うのだ。それが相性というものだろう。相性は性格的類似性であるが、性欲が湧くか、そうでないかは大きな要素である。前島は自分なりの解釈をしている。

だから性欲をそらない女性に交際する対象にならないと信じている。「ある愛の詩」では女性が白血症であることがわかっていても一層、愛し続けた。「俺にはあんな男になれない」と思うのだ。世の中には性交不能でも仲の良い夫婦はいる。また性交しても子宝に恵まれない男と女もいる。「結婚とはなんだ」と、前島はアルコールが回ってくるにしがた、混乱を覚えるのだ。前島は一杯で切り上げ、タクシーで寮に戻った。

翌朝はすっきりした気持ちだ。普段通り会社に出かけた。会社では月に一度の全体会議の日であった。部の全員が揃っていた。

「おはよう。本日の会議ではこれまでみなさんからの報告を基に本社企画室でまとめた資料に沿ってお話をしたいと思います。いま」

それは前島も今後の見通しについてまとめた報告に関係していた。

「企画室で検討した結果、今後の予測はきわめて厳しい状況になるということ。当社のみならず半導体業界の浮沈に関わることです。お配りした資料は⑥扱いをお願いします。そこに今後の課題が書かれていますので、この後それぞれの課で検討して早急に結論を上げてもらいたい」

続いてそれぞれの課が開かれた。

「先ほどの会議で指摘があつたように、海外での受注の減少傾向が続いているということです。日本の半導体コストは国内と海外向けの生産を合わせて設定していることはご存知の通りです。海外

向けは国際競争力に耐えられるように価格にはかなり柔軟性を持たせています。どうしても損益分岐点を下げるためには生産量を一定以上確保しなければならぬからです」

課長は論議の背景を話した。「国内のユーザーだけを見ると、分からないかもしれないが、海外とくに欧米では台湾、韓国、なかでもサムスンには相当、苦戦しているようですよ」

「日本の品質、精度は世界最高ですから、発展途上国にはそう簡単に追いつけないと思えますがね」

「それはその通りなんですが……」

リオ(ブラジル)のリゾート(著者撮影)



プロフィール

著者：岡田清治(おかだせいじ) 一九四二年生まれ ジャーナリスト (編集プロダクション・NET108 代表) 著書に『心の遺言』

『あなたは社員の全能力を引き出せますか!』 『リヨンで見た虹』など多数

※この物語に対する読者の方々のコメント、体験談を左記のFAXかメールでお寄せください。今回は「就職」「日本のゆくえ」「結婚」「夫婦」についてです。物語が進行する中で織り込むことを試み、一緒に考えます。 FAX: 0569-347971 メール: takamitsu@akashi-shinbun.net

前島はこのまま別れたかったが、デートの約束をすることで、気持ちの高ぶりを抑えた。

「はい。大丈夫です」

「山は好きですか。そうですね。では、土曜日にしましょうか」

「はい」

「東京は平野が広いので山のハイキングはどうしても遠くになります。今、考えているのは筑波山、高尾山、あるいは秩父の長瀨あたりですが、どこがお気に入りのコースがありますか」

「そうですね。筑波山に行きましようか」

「では、人形町からならJR上野駅中央改札口で十時に待ち合せて常磐線に乗って行きましよう」

二人は約束して別れた。

前島は坂上と別れ川崎に戻ったが、無性に飲みたくなったので駅近くのショットバーに入った。カウンター席は空き席があつた。

「バーボンの水割り、ダブルで……」

前島はバーボンのグラスを口に運び、半分ほどを一気に流し込んだ。

坂上はどのような女なのか。手を握り、口づけまですんなり許した。ところが映画館を出ると別人のような女に思えた。何か冷たいというか、陰のようなものを感じた。ただ、とろけるような舌触りの感触から宝石のような輝く肢体を連想していた。

次のデートも受け入れた。先ほどのことを思い巡らして「そうか、坂上は俺を受け入れているということかと、前島はそう思うことで満足できた。

ただ、次の瞬間、「愛は後悔しない」という名セリフについて、「愛の深さ」だとつぶやいたことにひっかかった。愛の深さは沼のように、あるいは深海のごとく到達点のないものではないのか。前島は愛欲と性欲は一体なものである。性欲のない愛情はありえない。少なくとも前島はそう思うのだ。それが相性というものだろう。相性は性格的類似性であるが、性欲が湧くか、そうでないかは大きな要素である。前島は自分なりの解釈をしている。

だから性欲をそらない女性に交際する対象にならないと信じている。「ある愛の詩」では女性が白血症であることがわかっていても一層、愛し続けた。「俺にはあんな男になれない」と思うのだ。世の中には性交不能でも仲の良い夫婦はいる。また性交しても子宝に恵まれない男と女もいる。「結婚とはなんだ」と、前島はアルコールが回ってくるにしがた、混乱を覚えるのだ。前島は一杯で切り上げ、タクシーで寮に戻った。

翌朝はすっきりした気持ちだ。普段通り会社に出かけた。会社では月に一度の全体会議の日であった。部の全員が揃っていた。

「おはよう。本日の会議ではこれまでみなさんからの報告を基に本社企画室でまとめた資料に沿ってお話をしたいと思います。いま」

それは前島も今後の見通しについてまとめた報告に関係していた。

「企画室で検討した結果、今後の予測はきわめて厳しい状況になるということ。当社のみならず半導体業界の浮沈に関わることです。お配りした資料は⑥扱いをお願いします。そこに今後の課題が書かれていますので、この後それぞれの課で検討して早急に結論を上げてもらいたい」

続いてそれぞれの課が開かれた。

「先ほどの会議で指摘があつたように、海外での受注の減少傾向が続いているということです。日本の半導体コストは国内と海外向けの生産を合わせて設定していることはご存知の通りです。海外

向けは国際競争力に耐えられるように価格にはかなり柔軟性を持たせています。どうしても損益分岐点を下げるためには生産量を一定以上確保しなければならぬからです」

課長は論議の背景を話した。「国内のユーザーだけを見ると、分からないかもしれないが、海外とくに欧米では台湾、韓国、なかでもサムスンには相当、苦戦しているようですよ」

「日本の品質、精度は世界最高ですから、発展途上国にはそう簡単に追いつけないと思えますがね」

「それはその通りなんですが……」

「国内ユーザーからはさらに厳しい品質も要求されています。むしろそうした要望に応えていくのが我々の使命ではないのですか」

「台湾や韓国を侮れないのは、日本に追いつけ追い越せという政策のもとに、彼らは日本の技術者を相当、雇い入れていることです」

「確かに、日本もアメリカ並みに簡単にリストラするようになっています。リストラ社員は忠誠心がないでしょうから、競合国の企業に行くことは十分あり得ることだと思います」

「何もリストラされなくても、現役の技術者が週末に招かれて技術指導して帰ってきているという噂は常識になっています」

「そういうことなら簡単に技術移転できるわけです。もちろんそれは機密保持の面から問題ですが、頭脳の中で力ぎはかけられませんか」

「そういうことが今後、広がれば日本の半導体は相当影響を受けることになるね。そこでみなにも今後の対策を考えてもらいたい」

課長は宿題を出して、その日の会議は終わった。

前島はデスクに戻った。半導体のことより、次の連休で坂上とハイキングに出かけることに思いを巡らした。

筑波山へはどのように行くか。昼休み本屋でハイキングの本に目を通した。JR上野駅まで出て常磐線で土浦駅へ向かう。そこから関東鉄道バスに乗り、筑波駅で筑波神社前行きバスに乗り換えて行く行程が書かれていた。頭に詰め込んで喫茶店で手帳にメモをとった。

他のガイドブックには、筑波駅からつじヶ丘まで直行筑波山シャトルバスに乗る。そしてロープウェイで女体山へ上るコースも示されていた。

筑波山は女体山と男体山がある。筑波山神社近くの宮脇駅からケーブルカーで男体山から女体山へ上る方法が主流である。楽なのは女体山からだと聞いたことがあつた。

昼食は筑波駅周辺でとるとして、夕方はどうするか。思い切って人形町に出て居酒屋に入ろうか。そうすればその帰りに坂上は自分のマンションに招き入れてくれるのではないか。それによって自分ほどの程度があるのか分かるのではないか。

「前島、今晩空いているか」

会議で久しぶりに顔を合わせた同僚Yが声を掛けてきた。

「いいよ。付き合おう」

「では七時に出よう」

二人はYの行きつけの割烹店までタクシーに乗った。

カウンターに座るや、Yは半導体の雲行きが怪しいと、グラスにビールを注ぐと、Yは開口一番、今日の会議での部長の話を持ち出した。このことがその後の前島の人生を狂わせるとはゆめゆめ思わなかった。

(続く)

子どもの情景（本との出会い）

水野啓子

遊びをせんとや生まれけむ 戯れせんとや生まれけん 遊ぶ子どもの声聞けば わが身さへこそ揺るがるれ

今年の大河ドラマ平家物語のタイトル曲の中で歌われています。以前から何となく心ひかれる詩歌として記憶していました。メロディーとして心に入ってきました。興味を覚えたので図書館で古典文学全集の中から探してみました。すると「梁塵秘抄」の中でも、著名な一首であり「今様」であることが判りました。文意は（遊びをしようとしてこの世に生まれてきたのであろうか、それとも戯れをしようとして生まれてきたのであろうか。無心に遊んでいる子ども達の声を聞いていると、自分の体までが自然と動き出すように思われる。）子どもを見つめる眼差しは、昔も今も変わらなぬと感じました。校注によれば（今様は十一世紀後半から約二百年ほど広い階層にわたって愛唱されたかと思われる歌謡で、今様歌の略称。当時においては新しい自由な表現と派手で魅力的な興味をもった歌謡が今様である。）何と今でも歌謡曲としては次々に生まれているので、タイムスリップしたようです。（今様の集大成が梁塵秘抄で、鎌倉時代中期ごろの成

立。十代より今様を愛好した後白河院《雅仁》が、五十歳代の勅撰。梁塵秘抄の意は、虞公と韓娥という中国古代のすぐれた美声の持ち主が、歌う時その響きで梁の上の塵が舞い立ったという故事にちなむ。）後白河院はドラマにも登場。なるほど史実に忠実に作られているものだと、自分の不勉強を棚にあげて、妙に感心しました。さしずめ今の時代ならどの歌手が梁の上の塵を舞い上げるのだろうかと頭を巡らせました。

次に出会った本は万葉集(巻五)。山上憶良の子等を思ふ歌

瓜食めば 子ども思ほゆ 柔食めば
まして思はゆ いづくより 来りし
ものぞ 眼交にもとなかりて 安寝
しなまぬ

（瓜を食べると、これを食べさせたらどんなに喜ぶだろうとまず子どものことが思われる。栗を食べると、まして子どものことが思い出される。一体子どもはどこから来たものであろうか。こうして離れていても子どもの面影が、眼前にやたらにちらちらして安眠しないことだ。）親心を詠んだこの歌の素晴しさは大辞林で子どもの項目をひくと、この歌が冒頭に載っているほどです。孫を持つこの身にも共感が深まります。永遠不滅の歌でしょうか。私事になりますが、私は小学生の頃より小さな子どもが大好きでした。特に赤ちゃんは見るのが楽しみでした。今では中年のおじさんになつたところが赤ちゃんの時、会えると嬉しくてわくわくした気持ちを覚えています。小学校の卒業文集の将来の夢は、幼稚園の先生と書き

ました。成人してその夢は実現し、結

婚退職した後、とても寂しい心持ちがしていました。その後母親になつてから家庭文庫をはじめ、子ども達との交流が復活しました。仲間を誘って一色おはなし会を作り、絵本や紙芝居の読み聞かせをはじめました。図書館をベースに続けて三十五年になります。途中から子ども達の大好きな人形劇も加わりました。今では子育て支援の会、保育園、幼稚園に招かれて人形劇の出しにいきます。子ども達の笑顔からエネルギーをもらい、仲間との交流もあり、人生を楽しく豊かにしてもらっています。大変な出来事の多い昨今、現実からの逃避かなと思う時もあります。それは人生の癒しという言葉のオブラートに包んでおきましょう。とは言え、人形劇は複数の人によって成り立っています。また大勢の子ども達が待っていてくれます。活動は責任を持って展開していかなければなりません。

次の本は「星の王子さま」

聖書の次によく読まれていると言われる本です。作者はサン・テグジュペリ。久しぶりに新潮文庫で読み返してみました。何度読んでも眼からウロコです。どの年代で読んでも新しい発見や感動があると言われています。サン・テグジュペリの生い立ちには次のようなものでした。一九〇〇年にフランスのリヨンで由緒正しい貴族の五人兄弟の三番目に長男として生まれた。三歳の時に父親を亡くし十六歳の時には二歳年下の弟を失っている。成人した後タイムル社やトラック会社を経て自分が憧れた空に向い、郵便輸送の路線

パイロットになり、モロッコの飛行場長になる。その時の孤独な生活の友として、ものすごく耳の長いキツネ「フェネック」を飼っていた。南米に派遣され妻と出会う。王子さまのバラの花のモデルと言われている。三十五歳の時にパリIIサイゴン間の飛行記録に挑戦し、リビア砂漠に不時着して生死の間をさまよう。一九四三年挿し絵も自分で描いた「星の王子さま」を出版。翌一九四四年コルシカ島沖合いで行方不明となる。サン・テグジュペリの遺作となった。

私の知っていたのは「おとなはだれも、はじめは子どもだった。しかしそのことを忘れずにいるおとなはいくらもない」という有名な言葉です。長い耳のキツネの言う「一番大切なことは目に見えない。」は折りにふれ思い出します。忘れてはいけないなど。又あれ以上素晴らしい挿し絵はないといつも思うのですが、作者が自分のイメージどおりに描いたのですから納得です。

最後に「夜回り先生 こころの授業」水谷修氏著ですが、氏の本を何冊か読みました。大人の自殺者が約三万人と言われる日本。子ども達のいじめや、ひきこもりも珍しくありません。水谷先生は語りかけます。

「大人の皆さん、子ども達にやさしさを配ってあげて下さい。子ども達は待っています。やさしく美しい言葉を。言葉は恐ろしいものです。それを語った人に責任を求めます。汚い言葉を語る人には汚い生き方をすることに。やさしい言葉を語る人にはやさしくあることを。死を強いる言葉には死ぬこと



「なな 5才」

を。やさしく生きていくことのできるやさしい社会にしなければならぬのです。」

読む度に心が痛みます。「子どもの情景」というタイトルは、かつて聞いたことのあるドイツの作曲家シューマンの組曲「子どもの情景」から借用しました。又聴いてみたいと思っています。

昨年三月十一日で状況が一変してしまつた日本。未来の子どもの情景がよりよいものでありますようにと切に祈りつつ。

参考文献

(1) 小学館一九八八年発行

校注 白田甚五郎

訳 新聞進一

(2) 通解名歌辞典 創拓社

武田祐吉 土田知雄 著

(3) 新潮文庫二〇〇〇年

河野真理子訳

(4) 日本評論社刊二〇〇五年

※全文中（ ）内は引用

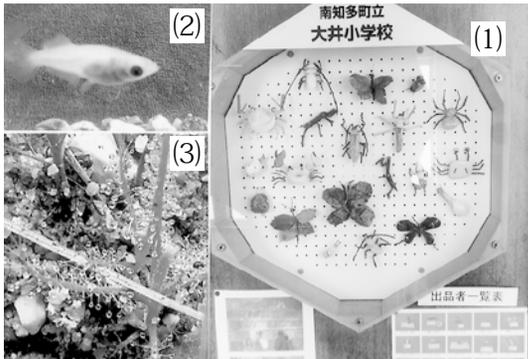


「めい 4才」

知多の動植物雑記(二八六)

原 穰

「夏がくれば思い出す、はるかな尾瀬、遠い空」の歌を思い出すのは、やはり今、知多半島の木々の緑、道端や水辺に咲く草花も色鮮やかで美しく、尾瀬の植物群落到り負けず劣らずの、知多の自然の豊かさをしみじみ、そんな折も折久しぶりに



豊かな自然に囲まれて

見れば、カニ、カミキリ、カメ、チョウチョ、ガ、そしてクモまで実に正確に。特にOh!と思ったのはクモ石端上、毛石端上、体は頭胸部と腹部の二部に分けられ、脚は八本で正確なもの。カニやでん

郷土を知る(百七十七) 奥川弘成



溜の味 濃厚なうまみと独特の香りがある溜りは、郷土の味として親しまれてきました。家庭で味噌を作っているところ、豆味噌の上澄みであった溜りは、煮魚や野菜のうま煮、アサリや小魚の佃煮などの調味料として使われていました。今、八十才代の方にこ

か く や 味噌の麹菌は、空気中や蔵に棲む菌を使っていたそうです。むしろ大豆を丸め、軒につるしたり、

むしろの上に置き麹菌をつけていたといひます。それは悪玉菌が繁殖しやすい環境でもありました。それで、雑菌が少ない冬の寒い時期に味噌仕込が行われていたといひます。

溜500cc、味噌500cc、水砂糖40gを弱火で三割ほど煮詰める。溜は上等の生引溜を使うと良い。甘口であれば少し氷砂糖を増す。 野菜のうま煮 味噌を煮立て、出し汁を流し入れ、沸騰したら旬の野菜、こんにやく

甘煮 小鯛、フナなどを焼いて1日置き、鍋にあみすてを敷いて、魚をきれいに並べて置き、軽く重しをして3時間ほど水煮する。溜、味噌、砂糖で味付けをして、照りが出るように煮上げる。 小魚は酢を少々使うと柔らかくなる。

城山の黒々とあり夏の月 遠くまで青葉輝く山の裾 茶席立ち碗の列若葉風 紫陽花の思春期試歩の杖 気温差に戸惑い来る心天 山畑の静寂破るほととぎす ジョギングの汗にまみれる道 ひとり居のひとりの気まま新茶こく

吉田ひろし 中村和弘 岩田つとむ 竹内三三彦 幾世八千代 磯村美耶子 村井みさを 荒川 達雄 村井 龍子 竹内ユミ子 山内 博子 波田 信子 都築 信子 竹内 艶子 服部 孝信 柴山 庄山 加藤 浩美 加藤 光子 谷川と志江 杉江京子 塚本千鶴 桑山 撫子 富田 悦子 林崎ひとみ 浦崎ひとみ 河瀬四子 清水文吉 清水トヲ吉 江端 久恵 船坂 義夫 中村 洋子

白竹(八日) 白竹(五日) 九月一日(七) 白竹(三日) 各午前七時午後七時 武蔵中央民館 武蔵中央民館 五月、十二日、十九日、二十六日 午後二時、四時、六時、八時、十日、十三日、十六日、十九日、二十一日、二十四日、二十七日、三十日 午後二時、四時、六時、八時、十日、十三日、十六日、十九日、二十一日、二十四日、二十七日、三十日

現在の味噌・溜り蔵では、空気中の麹菌にたよらなくても、麹室内で選ばれた菌を花つけないことのできる、いやな臭いのない味噌を製造されています。そして、代々にわたって棲みつく菌が各蔵元の味の基となっているといひます。

た、武蔵町のみゆき通りにある夢之蔵でも手に入れることができます。八百屋やスーパーでも特定の銘柄を販売しています。

など味の出るものを順に入れていく。煮汁がなくなるまで鍋返しをしてからつと煮上げる。(味付けの一例(5人前) 溜45cc、味噌30cc、出し汁60cc、砂糖大さじ1杯半。)

たくあん漬けを細かく刻み、しょうがと溜で和える。 古漬けなど塩からいものは、水や薄い塩水にさらして塩をぬく。

若竹俳壇 作品募集 毎月十日までに葉書で発行所へ

武蔵町立図書館 武蔵町立図書館 五月、十二日、十九日、二十六日 午後二時、四時、六時、八時、十日、十三日、十六日、十九日、二十一日、二十四日、二十七日、三十日

白竹(八日) 白竹(五日) 九月一日(七) 白竹(三日) 各午前七時午後七時 武蔵中央民館 武蔵中央民館 五月、十二日、十九日、二十六日 午後二時、四時、六時、八時、十日、十三日、十六日、十九日、二十一日、二十四日、二十七日、三十日

ちよととじやまします 輝之薫 磯部 輝之さん



16歳の頃、手先の器用な子を探しているとき、知人に連れていかれたところが高資陶苑だった。初めて土に触れた瞬間は、とても楽しかった。その時の楽しさは、今も変わらない。そのまま弟子入りし、

持物(ゆか道具一式)持持の方の、あつという間に50年が過ぎた。50年間、境界まで頑張ってきたという自負がある。高資陶苑では、勤務時間外に自分の好きな物をマイペースで作ってきた。高資陶苑活動の50年を磯部さんは、人に恵まれたと振り返った。師匠の仕事に柔軟に対応する人だった。師匠の考え方も師弟関係も堅苦しくなく、生き方も無駄に飾ることなく、仕事では責任をもたせてくれたので、生きがいも感じていたと、磯部さんは話す。

城山の黒々とあり夏の月 遠くまで青葉輝く山の裾 茶席立ち碗の列若葉風 紫陽花の思春期試歩の杖 気温差に戸惑い来る心天 山畑の静寂破るほととぎす ジョギングの汗にまみれる道 ひとり居のひとりの気まま新茶こく

若竹俳壇 作品募集 毎月十日までに葉書で発行所へ

白竹(八日) 白竹(五日) 九月一日(七) 白竹(三日) 各午前七時午後七時 武蔵中央民館 武蔵中央民館 五月、十二日、十九日、二十六日 午後二時、四時、六時、八時、十日、十三日、十六日、十九日、二十一日、二十四日、二十七日、三十日

